

## ■研究十二月往来(35)

### その後の暮松新九郎

#### ——難波のことも夢のまた夢——

宮本圭造

能(源氏供養)のシテ紫式部は、自らが石山寺の観音の化身であると最後に明かし、「夢の世と人に知らせん御方便」として『源氏物語』を執筆したのだ、と告げる。一方、能(邯鄲)のシテ蘆生は、「五十年の歓楽も」「一炊の夢」のうちの出来事という奇異な体験を通じ、「夢の世ぞと悟り得て」、国に帰ることになる。

この二曲は共に、「夢の世」をキーワードとする点で、互いに響き合うものがあるが、両曲はまた、上演記録の初見が同年同月同日の催しという、もう一つの共通点を有している。すなわち、寛正五年(一四六四)四月四日、観世音阿弥・又三郎政盛の父子による糺河原勸進猿楽の初日の四番目と五番目に、それぞれ(邯鄲)〈源氏供養〉が続けて演じられているのが、両曲の上演が確認できる最初の記録なのである。

その後も、室町く安土桃山時代を通じて(邯鄲)と(源氏供養)はたびたび同日に上演されているが、とりわけ注目すべきは、豊臣秀吉の時代に、この二曲を同時上演した例が集中して見られることであろう。文禄四年(一五九五)四月十日の聚楽第での太閤豊臣秀吉御成能、同年五月二十四日の伏見城での御能などがそれで、両曲のシテを勤めたのは、ともに「太閤様」すなわち豊臣秀吉その人であ

った。

天野文雄氏の調査によれば、秀吉が演じた能のレパートリーは、現行曲に限定すれば二十二曲(能に憑かれた権力者)、平成九年、講談社)。このうち、秀吉が最も頻繁に舞った能が、他ならぬ(源氏供養)であり、その上演回数は三年間で実に七回に達している。一方、(邯鄲)の上演回数は三回にとどまるが、

文禄四年五月、伏見城で秀吉が同曲を演じた際、本願寺の坊官下間少進からその出来を褒められたというエピソードが『能之留帳』に見えるから、(邯鄲)もまた、秀吉の得意曲であったと見てよいだろう。秀吉がこれらの曲をとりわけ好んだ理由が、「夢の世」という両曲の主題に因むものであったのか否かは元より定かでないが、秀吉の旧主の織田信長が、幸若舞「敦盛」の「人間五十年、下天の内をくらぶれば、夢幻のごとくなり」を愛誦したとの逸話が示すように、人間世界の営みを「夢の世」の出来事と捉える考え方は、戦国武将にとって非常に近いものであった。それはまた、秀吉の辞世として伝わる「露と落ち露と消えにし我が身かな難波のことも夢のまた夢」という和歌とも繋がる世界観と言えよう。それはさて、今回取り上げるのは、その秀吉に能の手解きをした暮松新九郎という人物

についてである。暮松新九郎に関しては、離宮八幡の神人の出身らしいこと、秀吉の能指南役として活躍し、秀吉主催の演能にしばしば出演したほか、大和猿楽四座を統括するような立場にもあったこと、などが知られているが、その履歴はいずれも断片的で、彼の生涯をめぐっては、なお不明な点が多く残されている。ことに暮松の晩年の動向に関しては同時代資料が皆無に近く、わずかに寛永十八年(一六四一)の刊本が備わる『北条五代記』や江戸中期の『落穂集』に、子細あって暮松が上方から江戸に下り、神田明神の神事能大夫となった経緯が簡略に記されるのみである。そして、これらの記事の信憑性を検証する具体的な資料は、何一つ残されていないのが現状なのである。

しかるに近年、暮松の晩年の動向に関わるかも知れない一つの資料に遭遇した。東北大学附属図書館蔵の三春藩秋田家文書が、それである。安土桃山く江戸前期に出羽国や常陸宍戸を領した秋田城介実季は、下間少進や虎屋立巴らに師事して能の稽古に励んだ数寄大名として知られる。下間少進から相伝された『童舞抄』に基づき、他流の型をも参照して、実季自ら編纂した大部な型付は、最近、『秋田城介型付』として翻刻・刊行がなされたが(『秋田城介型付研究会校訂』東北大学附属図書館蔵秋田城介型付)、平成二十七年、法政大学能楽研究所、東北大学附属図書館には、同型付を編纂するにあたって用いられたと思しき、様々な能楽資料の断片が数多く残されている。同館が作成した秋田家文書目録に、「諸能大事」「諸能大事三十六種」「諸能大事五十四種」「関表紙乱之事」などの書名で挙が

っているのがそれで、その中には、幸五郎次郎正能の晩年の困窮ぶりを伝える(元和六年)閏十二月十八日付の秋田城介宛書状や、下間少進が城介実季に宛てた相伝状など、興味深い資料が少なくない。ことに目を引くのは、慶長く元和の年記がある膨大な能の各曲型付で、その記述内容から、『秋田城介型付』の原資料と推測されるものである。その多くは虎屋立巴(観世宗節弟子)から相伝の型付で、他にも、「少法相伝」(田村)、「金春大太夫仕舞付」(鴨)、「洪屋紀伊守相伝」(仏原)、「観世太夫」(遊行柳)、「勘太夫」(ろう太鼓)、「日吉仕舞覚」(海土)など、流儀を問わず、幅広く資料が集められていた様子が窺える。同じ曲の型付が三、四点残されているケースも珍しくない。

注目すべきは、その中に「暮松宗白」なる人物の名を記す型付が、いくつか含まれることである。例えば、(俊寛)の型付には次のような奥書がある。

右、宮王宗竹仕舞也、暮松宗白所ニ在之  
テ書之「此ワキヲ昔宮王又兵衛シタルト  
キ、或ハ小刀ニテモ綱ヲキリタルコトアリ、又ワキサシニテモキリタルト也、少  
進法印語ラル、也、宗白申也此書之コシラ  
ヘハ、後ニサカイニテ宗竹分別ニテ仕タルト也、又暮松物語ハ、トウシンニテモ  
仕タル吉トカタリタル也」

右の文章は、この(俊寛)型付が、暮松宗白のもとにあった「宮王宗竹」の付の写しであることを伝えるものである。宮王宗竹は永正・大永頃に活躍した金春系の能大夫。「宗白」が語るところによれば、この型付に記載のシテの装束は、宮王宗竹が塚で同曲を演じた際に「分別ニテ仕タル」装束を書き留めたものという。

その他、「遊行柳 暮松宗白と端裏書がある(遊行柳)の型付も残されている。(遊行柳)は観世方の能であり、この型付の出所が気になるところである。また、(田村)の型付の端裏書にも、「古ほうしやうか流之由、宗白申也」とある。古宝生(宝生大夫重勝)関係の型付であることを「宗白」が語ったという内容の注記である。更に、(鶴羽)の型付に、「真如の玉をさつけ給べしと云時、ワキを見ル、宗白、或ワキノ方へはこひつくはひて二つあふく」とある「宗白」も、暮松宗白のことであろう。以上を総合するなら、暮松宗白なる人物が、秋田城介実季と交流のある能役者の一人であった可能性はきわめて高いと言えよう。ことに、暮松宗白が(田村)型付について、「古ほうしやうか流之由」と証言している点が注意を惹く。すなわちこのことは、暮松宗白と古宝生との何らかの接点を暗示するからである。

そこで注目されるのが、一連の型付のうち、(山姥)型付に付された一枚物のメモ書である。そこには、「山祖母/水又水ニテ古保昌働タルヨシ、宗伯物語、常陸小田ニテ氏晴ノ前ニテ仕タルト也」と、(山姥)の後場「水又水」の詞章の後にカケリを入れる型への言及がある。そして、このカケリの型を「古保昌」が「常陸小田ニテ氏晴ノ前ニテ」演じた由が、「宗伯」すなわち暮松宗白の談話として見えるのである。古宝生大夫は天正三年(一五七五)以前の没。右に「常陸小田ニテ氏晴ノ前」とあるのは、常陸小田城主小田氏治の御前での演能を指すらしく、それは小田城が落城する天正元年以前の出来事と思われるが、暮松宗白がその場に居合わせた可能性はきわめて低いと言えよ

う。というのも、この暮松宗白こそが、豊臣秀吉の能指南役として活躍した暮松新九郎その人ではないか、と考えられるからである。先の『落穂集』によれば、神田明神の神事能には「小田原崩の役人共」、すなわち北条氏を頼って小田原に下向していた宝生大夫の元座衆が大勢出演していたという。暮松宗白はその神田明神神事能の役者仲間から、古宝生の演技についての情報を耳にしたのではないだろうか。つまり、暮松が直接、古宝生と接する機会があったわけではなく、伝聞や書き物を通じて、古宝生の型に関する知見を得ていたと見た方が自然だと考える。

一時は秀吉の寵愛を受けて栄華の極みにあつた暮松新九郎も、その後は、子細あつて(秀吉)の勘気を蒙つたと推測される(江戸下向を余儀なくされ、神田明神の神事能大夫として晩年の日々を送つた。秋田城介実季と交流したのも、その晩年の出来事であつたと推測されるが、彼の人生の浮沈を見る時、秀吉の辞世「難波のことも夢のまた夢」は、また暮松の抱く感懐とも重なるものであつたのではないかと、思われてならない。『落穂集』が伝えるところによれば、暮松はそれからまもなくして没したらしい。その子孫については、これまで何一つ具体的な消息が知られていないが、下つて万治二年(一六五九)の三春藩秋田家の分限帳「万治二年御家中給人御物並御切米取惣帳」に、同家の家臣の一人として「狂言 呉松又助」と見えるのが、暮松宗白すなわち暮松新九郎の後裔の可能性が高いのではないかと、私は踏んでいる。

(法政大学能楽研究所教授)